

海外研修航海の意義

—価値ある教育プログラムとして—

吉原 さちえ^{*1}

Significance of Overseas Educational Cruise
—As a valuable educational program—

by

Sachie Yoshihara

Abstract

In order to explain the significance of overseas educational cruise that has continued for half a century, the purpose of this study was to find out its value after organizing the uniqueness and immutableness parts of the educational program. There are three uniqueness part of overseas educational cruise. The first is the utilization of the marine research and training vessel "Bosei Maru", the second is the experience at sea and on the ground, and the third is the process for implementing an educational program. There are three immutableness parts. The first is two limited training routes, the second is the program content at sea and on the ground, and the third is the number of team officers and the composition. There are three significances of overseas educational cruise. The first is the value of an educational program that includes uniqueness and immutability. The second is that the founding spirit of Tokai University is at the root. The third is that we have continued full-body education since the first, based on the spirit of founding Tokai University. Tokai University founder Shigeyoshi Matsumae's four words, an educational program based on the spirit of founding, reminded us of the significance of overseas educational cruise. I hope that the value will be inherited and enhanced.

I. はじめに

東海大学ではユニークな実践教育の場として大学が所有する実習船かつ国際航海旅客船でもある海洋調査研修船「望星丸」で、海外研修航海という独自性を活かした豊かなプログラム実施してい

る。1986年の第1回航海以来、半世紀に渡って一度も途切れることなく歴史と伝統を継承する本研修航海を通じて訪問した地は70箇所にのぼり、航海日数は2306日、研修に参加した学生は4034名、団役員（教職員）は683名である。この航海は学校法

* 1 東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

人東海大学傘下の大学・短大生（第31回からは外国人留学生を含む）が学部学科の枠を越え、船という限られた生活環境に集い、大自然の中で様々なことを学び、各寄港地では現地の大学などと国際交流を実践し、国際的視野を広げる企画を実施している。2019年度第51回目の海外研修航海は、航海半世紀の歴史を踏まえ生涯の理想を求める船旅としての原点に立ち戻り、新たな一步を踏み出す航海として出航直前まで準備を進めてきた。しかし、世界中で拡がりつつあった新型コロナウイルスにより、第51回海外研修航海は2020年2月10日（出航10日前）にやむなく中止が決定された。50年もの間、海外研修航海が継承されたのは本研修の価値や意義を分かち合う経験者の経験知の賜物である¹⁾。

そこで本研究の目的は、海外研修航海の教育プログラムとしての独自性と不易性を整理したうえでその価値を見出し、コロナ後の再開に向けて海外研修航海の意義を再明示することである。

研究方法是、主に第51回海外研修航海や松前重義関連資料並びに文献、東海大学ホームページに掲載されている活動記録を参考にし、教育プログラムとしての独自の並びに不易的な部分を整理する。そのうえで、海外研修航海の意義を説くことを試みる。

Ⅱ. 教育プログラムとしての独自性

1. 海洋調査研修船「望星丸」の使用

東海大学ホームページ海洋調査研修船「望星丸」²⁾によれば、海洋調査研修船「望星丸」は、(2,174国際総トン) 1962年に日本初開設の海洋学部の海洋実習および調査・観測のほか、学園全体としての海外研修航海、地域社会の青少年に対する海洋思想の普及活動を目的として航行している。大学独自の研究だけでなく、日本の海洋調査船の中でも総合的海洋調査機能をもつ調査船であることから、文部科学省、農林水産省等の各省庁、および大学研究機関より委託研究を受け、海洋に関する国家プロジェクトの調査船として数多くの調査研究を行い、そこで得られたデータは様々な分野で役立てられている。最近では、地球科学的な視点に立つ調査研究も多く行われ、環境問題や資源問題に新た

な視野を拓くものとして、内外から高い評価を集めている。

海外研修航海はこの海洋調査研修船「望星丸」を使用し、1986年の第1回航海から2019年の第50回まで南太平洋やアジア諸国を巡りながら、船内の限られた生活環境の中で、教員や仲間との共同生活を通じて協調性を養い、より豊かな人間形成を図り、人間性を培うことを目的としている。本研修の特徴的な独自の教育プログラムの一部分である。

2. 洋上と陸上における経験

1) 洋上での3つの経験

多くの研修団員（学生と教職員）にとって海外研修航海は初体験である。普段の生活では簡単に飛行機で到着することができる場所にも、望星丸を使用することで何日もの時間をかけて陸上の目的地（寄港地）に辿り着く。

1つ目の経験は、松前³⁾によると、全身体活動を通して自然の厳しさと美しさに気づくことである。大海原は時として船舶を引き裂くような荒波を起こし、また風が一切なく揺れを全く感じることない風を生み出す。どちらも自然の一面であり、それらの環境下で自身や仲間の存在の大きさを肌で感じ、自然と共生することの尊さを己の経験として受け止め、一人の人間として大切なことに気づく。人間の自然に対する責任など、これから地球の中でどのように振舞うべきかななどを真剣に考え、研修中の行動の変化に繋がり、研修後も継続され続ける。

2つ目の経験は、本研修に参加した多くの学生・教職員が海洋調査研修船「望星丸」の内部を知る機会がプログラムの一つとして組まれていることである。具体的には、入港に際しての官庁手続きや船員事務管理などマネジメントを担う事務部について、船の操縦、船体の保守、積み荷の管理を行う甲板部について、食材調達・調理や食材保管場所の倉庫や調理場などを担う調理部について、ウェットラボ・ドライラボに分かれた各種観測機器類の管理・使用する観測部について、船を動かす根幹を管理運営する機関部について五感を使って学ぶことができる。

3 つ目の経験は、船内生活である。船内では基本的には規則正しい生活を送る（表 1）。6 時起床に始まり、点呼・体操後は、班ごとに学生食堂、階段、廊下（2nd）、シャワー室・ト

表 1: 船内の 1 日の生活

時 刻	日 課
6:00	起床
6:30	点呼、体操、掃除
7:30	朝食
9:00~11:00	講座、イベント準備など
11:30	昼食
13:00~15:00	クラブ活動、調査発表など
15:30~16:30	
17:00	夕食
18:00	イベント準備
19:00	担当ごとの打合せ
20:00	班長会議
21:45	点呼
22:00	消灯

イレ、廊下（Lower）、後部甲板の掃除を毎日行う。掃除に関しては、寄港地に入港する際には大掃除が半日かけて実施される。7 時半から朝食、9 時から午前プログラム、昼食、13 時から 16 時半は午後プログラム、17 時から夕食、18 時から 21 時半ごろまでは各種ミーティング、点呼、22 時消灯が 1 日の流れである。比較的余裕があるようにみえるが、実際には行事や研修など学生主体の企画が多く、各自複数兼務していることから日々ミーティングや準備をしている状況である。また気象条件によっては体調不良になることもあり、陸上とは異なる環境で予定通り事が進まないこともある。船内生活は限られた空間で原則 1 部屋 8 人の共同生活を送る。研修期間中は仲間と寝食を共にし、友情を育み、人との関わりや生きる知恵を得るために、非効率でありながらも時間をかけて答えを導きだすような努力と考察を重ねる経験をする³⁾。日々便利なものに囲まれた陸上での日常生活とは全く異なり、人間味溢れた生活を船内で送る。

2) 地上（寄港地）での経験

1986 年の第 1 回航海から 2020 年の第 51 回の航海まで海外研修航海の航路はアジアと南太平洋の 2 航路である。1996 年の第 28 回は世界一周をしている。第 1 回の航路はアジアであったことから、第 51 回は海外研修航海が始まって以来半世紀が過ぎ、原点回帰かつ新たな一歩を踏み出す意味でアジア航路に決定した。アジアと南太平洋航路の大きな違いは、行程の長さである。前者は日本から近距離のところ寄港地が点在しているため、行程日数が比較的短く、寄港地の数は多い。後者は赤道を越えて南太平洋諸国に向かうため、行程日数が

長く、寄港地間の移動にも時間がかかり寄港地数は少ない。

地上（寄港地）での経験は第 51 回の研修計画を参考にして解説する（表 2）。

表 2: 第 51 回海外研究航海で予定していた地上研修

寄港地		テーマ	研修方法
那覇	沖縄	歴史と文化	グループ別/全体
コタキナバル	マレーシア	自然と文化	全体/選択別/グループ別
バンコク	タイ王国	大学交流と文化	全体/選択別
ダナン	ベトナム社会主義共和国	歴史と文化	グループ別/選択別
基隆	台湾	歴史と文化	全体/グループ別

<研修方法>①全体：全学生が同研修を実施 ②選択別：希望選択した研修を実施
③グループ別：グループ別に研修の企画と実施

第 51 回では東京を出港し横浜に帰港する 38 日間の海外研修航海期間中に合計 5 つの寄港地（4 か国）を巡る予定であった。1 つ目は那覇（沖縄）で、歴史と文化に触れることをテーマとし、少人数のグループや全体での研修予定していた。グループ研修は学生が自ら研修目的を考え行動計画を立て団役員の指導と確認の上で実施される。全体研修はあらかじめ研修団として考案したプログラムである。2 つ目はコタキナバル（マレーシア）で、自然と文化をテーマとし、全体、選択別、グループ別での 3 つのタイプの研修を予定していた。コタキナバルでは比較的時間の余裕が取れたことと研修生が自ら行動できる範囲の治安が良好であることから、地上での研修スタイルの幅を拡げることが試みた。選択別研修は、その中で複数のプログラム（2-3 つ）を用意し、研修生が事前に選択し参加する仕組みである。3 つ目はバンコク（タイ王国）で、大学交流と文化がテーマであった。大学交流は東海大学がアジア諸国における国際貢献の象徴とする一つのタイ王国・モンクット王ラバカン工科大学（以下、KMITL と略す。）で日本語を学ぶ学生との交流を予定していた。前学長の高野教授⁴⁾は、東海大学は大学が果たすべき使命として当時（2011）、「教育」「研究」「社会貢献」に加え、「国際貢献」を明確に掲げ、アジア諸国をはじめ諸外国に向けて積極的な学術支援の取り組みを、国際交流・国際貢献を通して世界で活躍できる教養人を育成していくことが求められていることに照し合せて説明した。さらに、この考えは創設者・松前重義博士が掲げた建学の精神に通じるものとし、「松前博士は、建学当初から『他分野を理解し、他分野

の人たちと協働できる能力が大切だ』と説いていたこと挙げ、自分自身と違うものを受け入れるということは、まさに国際交流の基本である」と述べていた。海外研修航海の教育プログラムにも 2011 年の数年前から留学生も参加できるようになった。東海大学と KMITL の交流は長い歴史があり、1965 年に KMITL の前身であるノンタブリ電気通信大学の卒業生を編入学生とし別科日本語研修課程、工学部通信工学科に受け入れたことに始まる。その後 KMITL とは国際貢献から発展し、学術協定協力を結び幅広い学術交流を展開している⁴⁾。歴史的・学術的・人材的繋がり深い KMITL との大学交流は第 51 回の中心的地上（寄港地）研修の一つであった。4 つ目はダナン（ベトナム社会主義共和国）、5 つ目は基隆（台湾）で、歴史と文化をテーマに掲げいずれの寄港地でも 2 つのタイプの研修を予定していた。両寄港地ともに東海大学の同窓会（ダナンは 2020 年に設立）があり、多くの卒業生が活躍している。とくに台湾に関しては歴史的に親日国であるため、治安も良く、公共交通機関も日本のシステムを取り入れ充実していることから、第 51 回の最終寄港地における研修学生に対する主体的な教育プログラムとしてグループ別研修を考えていた。

地上（寄港地）での経験は第 51 回の寄港地研修を例に挙げた。いずれの寄港地でも学生の主体性を意識し、教育要素を含む経験ができる研修を用意していた。

3. 教育プログラム実施に向けたプロセス

第 40 回以降、教育プログラムの基本的な枠組みは、航路が南太平洋でもアジアでも大きく変わらない。しかし、学生と団役員は毎回異なる顔ぶれになる。そのため教育プログラムを遂行するにあたってのプロセスは各回で新たに練り直し構築している。構築方法は各々異なり、舵取り役は団役員の中で副団長という役職に就いた教員が概ね務める。例えば、副団長がプロセスの枠組みを決め、内容を団役員が考える場合もあれば、プロセスも内容も副団長を中心としながら全団役員が役割分担しながら決定する場合もある。両者にはそれぞれにメリットとデメリットがある。前者のメリットは短時間で決定事項が生み出せる一方、デメリットは

副団長の負担が他の団役員よりも非常に大きくなる傾向が強い。後者のメリットは全団役員が共通理解のもと役割を分担しながらプロセスを歩みことで情報共有がしやすい一方、デメリットは副団長以外の団役員も通常の授業や業務以外に本研修に対し研修以前から多くの時間を割いて協力してもらう必要がある。第 51 回は後者の方法を取り、教育プログラム実施に向けて全団役員でプロセスを歩む方法を選択した。その結果、本研修が本格的に始まる以前に団役員間では情報共有だけでなく相互理解も深めることができ、研修団の中での他者承認が各々の意識向上に繋げられた。また第 51 回は 1986 年の第 1 回から半世紀の歴史を歩み続けた海外研修航海の新たな一歩として、「原点に戻る」「新たな第一歩」⁵⁾、「歴史を踏まえ、歴史を作る」⁶⁾という言葉を念頭に置き本研修直前までプロセスを積み重ねてきた。

Ⅲ. 教育プログラムとしての不易性

1. 研修航路

海外研修航海の航路はアジアと南太平洋の 2 つである（表 3）。

表 3：海外研修航海の航路と航海回数

航路	回数	備考（内訳）
アジア	9回	第1回,2回,5回,15回,19回,25回,45回,46回,51回
南太平洋	41回	アジア航路の回と第28回を除くそれ以外の回 第50回は記念回として航路と空路
世界一周	1回	第28回

全 51 回の海外研修航海のうち、アジア航路は 9 回、南太平洋航路は 41 回、世界一周は 1 回（1996 年、第 28 回）である。研修航路は、南太平洋航路が全体の 4 分の 3 を、アジア航路が 4 分の 1 を占めている。第 1 回と第 51 回のコースである（表 4）。

表 4：第 1 回と第 51 回のコース

回	コース
第1回	東京－那覇－基隆－香港－バンコク－マニラ－父島－東京
第51回	東京－那覇－コタキナバル－バンコク－ダナン－基隆－横浜

コースを比べると、重なる寄港地が那覇、基隆、バンコクと寄港地の半数を占める。選択された寄港地を見ても第 51 回は第 1 回の歴史を踏まえて、新たな一歩としての歴史を創るためにふさわしい寄港地研修が計画されていた。海外研修航海を 50 年の間一度も途切れることなく継続し、航路を 2 つに限定し積み上げてきた研修諸国との関係は、

言うまでもなく教育プログラムの「変わらない」良さから生み出される「継続－繋がり－信頼」を築く一側面である。

2. プログラム内容

1) 洋上プログラム

研修学生が自ら企画運営する洋上プログラムは、大きく研修と行事に分けられる(表5)。

表5: 洋上プログラム(研修と行事)の内容(第51回)

項目	内容
研修	洋上講座 団役員及び望星丸士官による専門分野(全13回)
	外国語講座 ネイティブ団役員による実践英語(全8回)
	一次救命処置 医師・看護師団役員による救命救急
	調査 寄港地(歴史・自然・文化)と航海(望星丸・船内業務)
行事	スポーツ大会・大学交流 洋上卒業式・卒業生を送る会・Farewell Party・その他
	クラブ English&Fishing・韓国文化・シネマ&カフェ・音楽 Bosei Memory・女子力アップ・トレーニング&海洋観測・球技 かるた&テーブルゲーム・洋上オリンピック&パラリンピック

研修は、幅広い教養と基礎知識を身に付けるための多岐な分野に渡る洋上講座、英語コミュニケーション力を磨く語学講座、救命救急、調査(寄港と船内)が設けられている。これらの中で寄港地調査は地上プログラムの寄港地研修を充実させるために、学生自身が事前調査・実際(研修)・事後報告という一連のプロセスを通じた学びがある。行事は、スポーツ大会、大学交流、洋上卒業式、卒業生を送る会、Farewell Party とクラブ活動がある。いずれも学生が主体で企画・運営する。

洋上での活動は、出航前に事前に企画内容を凡そ決定し、必要な道具や材料を限られた予算の中で揃え、荷積みを行う必要がある。実施直前の最終打ち合わせや予行練習などは船上活動になることから出航前の準備が非常に重要である。船上では気象条件により日程や実施場所の変更に臨機応変に対応する場面がしばしばある。

2) 地上(寄港地)プログラム

地上プログラムは寄港地研修と大学交流の2つである。まず寄港地研修は地上(寄港地)での経験(Ⅱ.2-2))で先述したが、研修方法は全体・選択別・グループ別の3つのタイプがある。そのうち全体は全研修学生が同じ内容で研修するのに対し、選択別は3-4の選択肢があるため研修内容に違いが生じる。グループ別研修は5-6人の少人数で自

由に計画を立て行動するため多様な研修内容が展開される。第51回を例にすると、表2のように寄港地が沖縄・コタキナバル(マレーシア)・バンコク(タイ王国)・ダナン(ベトナム社会主義共和国)・基隆(台湾)の5つあり、テーマに歴史・自然・文化を示したように寄港地には世界遺産が多く、民族の歴史や文化、自然環境に直接触れることで各々が人間を取り巻く環境に対して考察し、思考の幅を広げることに繋がることを期待していた。さらに学生が多面的に物事を捉えるために、寄港地調査では、寄港地の数に合わせたグループを編成し、自ら調べ発表することを通して、より深く考察するきっかけを各自持つことができる時間を用意した。その目的は寄港地研修を充実したものにするために、各寄港地について詳細な調査を事前に出航前と船上で行い、発表を通して研修団全体で共有し理解を深めることができることである⁷⁾。具体的な内容は自然環境・歴史・文化・観光地・産業・信仰や宗教・その他国によって異なる政治・経済・社会について多面的な観点から詳細に調査する。自然であれば動植物や気候を、文化であれば戦争(沖縄戦やベトナム戦争)も含む一側面ではなく包括的に捉え文献・各種資料・インターネットを駆使して情報収集し整理する⁷⁾。発表は発言者にとっては聴講者がいることで分かりやすく伝達するための工夫を凝らすことで、自身での深い理解へと繋がる。聴講者は自らの思考に留まらず新たな発見や気づき、興味関心の広がりが見られる。寄港地調査から得られた知識や考察は、実際の研修で人類普遍の課題へと考察が広まり、前学長高野教授⁴⁾による「これからの時代の国際交流は、日ごろからともに学び、ともに働く、すなわち“協働”でなければならない」という意味に非常に近い部分で研修ができ、グローバルな視点を培う一役を担っている。またPDCAサイクルを活かし事後報告を様々な発表形式で行うことで振り返りと改善点が見つかり、次の寄港地調査の内容や発表に繋がる相乗効果が得られる。地上プログラムの一つの寄港地研修は事前調査や事後報告と連動し、プロセスを踏むことでより有意義な学びの機会となる。

次に大学交流はアジア航路の場合は特に東海

大学にとってもアジア地域にある大学と数多くの協定を結ぶ中で、タイ王国・モンクット王ラバカン工科大学（KMITL）は地上（寄港地）での経験（Ⅱ. 2-2）で先述した通り、1965 年から前身大学からの留学生が東海大学に入学した時以来長い歴史を共に歩み築き上げてきた絆と信頼を背景に持つ中で第51回はその歴史の1ページに足跡を残す機会であった^{4) 6)}。次の時代における世界経済の牽引役としての動向が国際的にも注目されるASEAN 諸国を始めとしたアジア諸地域であり、その中で若者同士の交流や、多様な歴史・自然や文化を持つアジア諸国での国際交流は極めて大きな意味を持つとともに大きなチャンスと位置付けていた³⁾。

3. 団役員数と団役員構成

第40回から第51回までの団役員数と団役員の構成である（表6）。

表6：団役員数と団役員構成（第40回以降）

回	第40回	第41回	第42回	第43回	第44回	第45回	第46回	第47回	第48回	第49回	第50回	第51回
団役員数	15	14	14	14	14	14	13	13	13	14	14	15
内 訳	団長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	副団長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	医師	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	看護師	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
	教員	7	6	6	7	9	7	6	6	7	7	7
	職員	3	3	3	2	0	2	2	2	2	2	2

団役員数は第40回が15名、第41回から第45回は14名、第46回から第48回が13名、第49回と50回が14名、第51回は15名である。団役員の構成は団長と副団長が各1名、医師が2名（航海日数の半分で入替えのため、前後半1名の配置）、看護師1または2名（第51回は医師と同様に前後半入替えのため各1名）、教員が6-7名、職員が2-3名である。医師と看護師を除いた団役員（団長と副団長を含む）は7キャンパスと1フィールドに広がる大学19学部と短大から万遍なく選出されたため、多岐に渡る分野から団役員が構成される。各団役員は個人としても異なる背景を持つため、例えば洋上プログラム中の洋上講座は、多彩な魅力的かつユニークな内容に溢れている。団役員数と団役員の構成は過去十数年ほとんど変わらない。医師と看護師が研修を通して帯同していることは海外研修航海にとって安全を確保する上で最も不可欠である。各回の選出された団役員の顔ぶれにより、

唯一無二な団役員のイメージが作られる。

Ⅳ. 海外研修航海の意義

1. 教育プログラムとしての価値

海外研修航海の教育プログラムとしての独自性と不易性に着目しこれまで述べてきた。独自性には海洋調査研修船「望星丸」の使用、洋上と陸上における経験（洋上での3つの経験、地上（寄港地）での経験）を、不易性には研修航路、プログラム内容（洋上プログラム、地上（寄港地）プログラム）、団役員数と団役員構成を挙げた。教育プログラムにおける独自性は私立大学としての東海大学の価値を高め、不易性は東海大学の歴史、信頼と誇りを築き上げ、アジア諸地域並びに南太平洋諸国での価値を生み出している。

2. 東海大学の建学の精神

海外研修航海は東海大学の創立者松前重義が掲げた四つの言葉を踏まえた教育プログラムである。松前重義は自らの人生の中で、内村鑑三と出会い彼の思想に深く感銘を受け、また敗戦後の国の復興を教育によって成し遂げた近代デンマークの歩みに心打たれ、「国造りの基礎は教育にあり、教育を基盤としてより良き社会として平和国家を築こう」と決意したとされ、デンマークの国民高等学校の教育を模範としながら東海大学の原点となる「望星学塾」を開設し、四つの言葉を掲げた^{8) 9) 10)}。

若き日に汝の思想を培え
若き日に汝の体軀を養え
若い日に汝の智能を磨け
若き日に汝の希望を星につなげ

これらの言葉は東海大学の建学の精神であり、変わることのない一貫した東海大学の教育の方針である¹¹⁾。人道主義、人格主義に基づく正しいものの考え方、見方を確立させる思想教育が極めて大事とし、身体を鍛え、知能を磨くとともに、人間・社会・自然・歴史・世界等に対する幅広い視野と思考力、一人ひとりが人生の基盤となる思想を培い、心を通い合わせることが出来る豊かな心を持ち、人生の意義について共に考えつつ将来という希望の星に向かって生きていこうと語りかけている^{11) 12) 13) 14)}。東海大学は創立者の精神を受

け継ぎ、明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性を持った人材を育てることで「調和のとれた文明社会を建設する」という理想を高く掲げ、現在も歩み続けている^{14) 15) 16)}。また国の行方も人類の将来も、これに携わる人間の思想に左右されることを身をもって体験した松前重義は、兼ねてから目指していた「思想を培う教育、文科系と理科系の相互理解をめざした教育」を東海大学のなかで実践した^{17) 18)}。お互いに理解し合える要素を学生時代に養うこと、つまりは互いがそれぞれの立場を尊重し合って手を握り、前進してゆく態勢ができれば、日本という国の発展が助長されと考え、大学の方針に入れたのである¹⁷⁾。松前重義が教育に託したものは、人類の幸福と平和の実現に向かって、明日の歴史づくりを担う人材の育成であった。松前重義が生きた当時も今も現代社会の変化は激しく、私たち人類の未来にも様々な難問が横たわっているからこそ、高い理想をもって未来をみつめていくことが、いま私たちに最も求められているという意味が「希望を星につなぐ」に込められている^{19) 20) 21) 22)}。

3. 海外研修航海と建学の精神

海外研修航海のねらいは東海大学の海洋調査研修船「望星丸」と使用して海外の諸国を訪問し、多様な自然や文化に触れることで、国際的な視野を獲得し、実体験に基づく世界観と人生観の確立を目指している。また船内という限られた空間と環境の中での共同生活を通して、豊かな人間形成を図ることとする²³⁾。これらは創設者の松前重義が掲げた四つの言葉、「建学の精神」に合致している。第51回海外研修航海は2019年12月から世界中に一気に広がった新型コロナウイルスの感染が原因で、2020年2月に中止を決定した。1年が過ぎようとする今も第3波というこれまでに経験のしたことのない感染者拡大に直面している。まさに目まぐるしく変化する社会の中でどんなに時を経ても変わらない普遍的な存在としての海外研修航海は、若者が兼ね備えている無限の可能性を信じ、高い理想を持ち歩み続けることの価値を踏まえ、半世紀に渡って一度も途切れることなく継続してきた。その歩みは「希望を星につなぐ」に込められた意味を十分に踏まえて体現してきた証

である⁵⁾。このように海外研修航海は建学の精神として受け継いできた創設者の意志を引き受け、歴史を積み重ねてきた。

V. まとめ

本研究では半世紀に渡って継続してきた海外研修航海の意義を説くために、教育プログラムとしての独自性と不易性を整理したうえでその価値を見出すことを目的とした。

海外研修航海の独自性は3つある。1つ目は海洋調査研修船「望星丸」に乗船し、船内の限られた生活環境の中で共同生活や寄港地での研修など非日常性を有していることである。2つ目は洋上と地上の経験である。洋上では全身体活動を通して自然の厳しさと美しさに気づくこと、海洋調査研修船「望星丸」の内部を知る機会がプログラムの一つとして組み込まれていること、規則正しい船内生活を送ることの3つである。地上ではアジア諸国と南太平洋諸国ともに東海大学と繋がりを重視し教育要素の含む寄港地研修を用意していることである。3つ目は教育プログラムの実施に向けたプロセスにメリットとデメリットがあり、かつ各回の団役員の構成メンバーによって遂行方法が異なることである。海外研修航海の不易性は3つある。1つ目は研修航路がアジアと南太平洋の2つの航路に限定されていることである。研修諸国とは将来性のある国際交流・国際関係を築いている。2つ目は洋上と地上におけるプログラム内容である。洋上プログラムは研修と行事があり、学生にとって新しい知識や興味関心が持てる講義や、学生の主体性を生かした準備・企画・運営できる内容がある。地上プログラムは寄港地での研修に留めるのではなくPDCAサイクルを活用し、事前調査や事後報告をすることで全体でより理解を深め、研修中を通して評価・改善をすることを意識している。3つ目は団役員数と団役員構成である。団役員数は15名前後であり、医師と看護師が研修中随時帯同し、教職員は全学19学部と短大から万遍なく選出され、多岐に渡る分野から団役員が構成される。

海外研修航海の意義は3つある。1つ目は独自性と不易性を含む教育プログラムとしての価値である。2つ目は東海大学の建学の精神が根底にあることである。3つ目は変化の著しい現代社会に生き

る若者に対し、自身の可能性を信じ高い理想を持ち歩み続ける建学の精神を踏まえ、第 1 回の海外研修航海からこれまで全身体活動的教育を継続してきたことである。

VI. 結びに

1986 年の第 1 回に始まる海外研修航海は、半世紀に渡って「望星丸」という船を活用しながら非日常性を有した教育を通してその価値を構築してきた。2020 年 2 月に予定していた第 51 回は、世界中に広がった新型コロナウイルスにより止むを得ず中止する決断を下した。この機に東海大学の創設者松前重義の四つの言葉である建学の精神を根底に置いた教育プログラムである海外研修航海の意義を改めて意識し、見直すべきことは精査したうえで改善していくことが、再開後の海外研修航海の価値を高め、継承し続けていくことの一助となると期待する。

参考文献・資料

- 1) 吉原さちえ (2020), 海外研修航海の継承～恒常性と独創性に着眼して～, イベント学会「第 23 回研究大会」, <https://eventology.org/congress>, デジタル抄録掲載準備中
- 2) 東海大学ホームページ, 海洋調査研修船「望星丸」, <https://www.u-tokai.ac.jp/about/research/facilitiesbouseimaru/> (最終閲覧日 2020 年 12 月 20 日)
- 3) 松前義昭 (2020), 海外研修航海第 51 回見聞き A3 冊子, 「人生の糧となる経験と感動、そして友情を」東海大学チャレンジセンター, p. 4
- 4) 高野二郎 (2011), TOKAI 161 号, 特集 1 アジア諸国の大学・公的機関との連携を通じて～活性化する国際的学術交流～, 東海大学学園校友会, p. 4
- 5) 第 51 回海外研修航海実行委員会 (2020) 1. はじめに 1.4 海外研修航海企画委員会委員長挨拶 松前義昭, 学校法人東海大学 第 51 回海外研修航海 研修のしおり, 第 51 回海外研修航海実行委員会, p. 3
- 6) 山田清志 (2019), 学校法人東海大学 第 51 回海外研修航海 研修のしおり, 第 51 回海外研修航海実行委員会, p. 4
- 7) 第 51 回海外研修航海実行委員会 (2020) 3. 研修 (3.4 寄港地事前調査), 学校法人東海大学 第 51 回海外研修航海 研修のしおり, 第 51 回海外研修航海実行委員会, p. 23
- 8) 松前重義 (1986), 東海大学出版会, 東海大学の精神, pp. 3-4, pp. 8-9, p. 20. 29. 95
- 9) 松前重義 (1946), 株式会社東海書房, 敗戦デンマークの復興を見よ, p. 20, 123
- 10) 松前達郎 (1986), 学校法人東海大学, 松前重義と望星学塾—その思想と行動, 序 松前重義 東海大学総長・望星学塾塾長, pp. II-VI
- 11) 松前重義 (1991), 東海大学出版会, 青春に生きよう—松前重義 望星学塾 講演集—, pp. 140-141
- 12) 松前重義 (1986), 東海大学出版会, 東海大学の精神, pp. 112-113
- 13) 松前重義 (1961), 東海大学出版局, -東海大学昭和 36 年度 入学式における学長式辞— 建学の目的と大学の使命, p. 8
- 14) 東海大学ホームページ, 建学の精神, <https://www.u-tokai.ac.jp/about/profile/spirit/> (最終閲覧日 2021 年 1 月 22 日)
- 15) 1 Mission Statement of TOKAI UNIVERSITY 東海大学の精神, 東海大学学長室
- 16) 松前重義, 白井久也 (1978), 松前重義, わが昭和史, 序
- 17) 松前重義 (1986), 東海大学出版会, 東海大学の精神, pp. 16-17, p. 20, pp. 88-89, pp. 132-134
- 18) 松前重義 (1961), 東海大学出版局, -東海大学昭和 36 年度 入学式における学長式辞— 建学の目的と大学の使命, pp. 3-4
- 19) 松前重義 (1986), 東海大学出版会, 東海大学の精神, pp. 116-117
- 20) 東海大学ホームページ, 松前重義と建学の精神, <https://www.u-tokai.ac.jp/about/profile/spirit/spirit/> (最終閲覧日 2021 年 1 月 22 日)
- 21) 松前達郎 (1986), 学校法人東海大学, 望星学塾創立五十周年記念出版 松前重義と望星学塾—その思想と行動, pp. 9-10
- 22) 篠原登 (1986), 学校法人東海大学, 望星学塾創立五十周年記念出版 松前重義と望星学塾—その思想と行動, p. 65
- 23) 第 51 回海外研修航海実行委員会 (2020) 1. はじめに 1.1 海外研修航海のねらい, 学校法人東海大学 第 51 回海外研修航海 研修のしおり, 第 51 回海外研修航海実行委員会, p. 1